

日本語のジェンダーと（イン）ポライトネス：ステレオタイプの見方を再生産していないか

松村， 瑞子
九州大学大学院言語文化研究院言語環境学部門

<https://doi.org/10.15017/1932367>

出版情報：言語科学. 53, pp.55-64, 2018-03-12. Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

日本語のジェンダーと（イン）ポライトネス

—ステレオタイプの見方を再生産していないか—

松村 瑞子

1. はじめに

ジェンダーとポライトネスについての研究には、Lakoff(1975)、壽岳(1979)、Tannen(1989)、Holmes(1995)、井出(1985, 1997)、松村(2001)、Mills(2003)、Okamoto(2004)、宇佐美(2005)、因(2006)、Suzuki(2007)、Ohashi(2013)等々数多くの研究がある。これらの先行研究のうち、合理主義的アプローチ(Rationalist Approach)と言説的アプローチ(Discursive Approach)という対照的な観点からジェンダーとポライトネスについて論じたものに Holmes(1995)と Mills(2003)がある。本論文では、先ずこの2つのアプローチを対照させることで本研究の立場を明らかにした後、三牧(2013)、ミラー(2000)を概観し、さらに実際の会話を分析することで、日本語のジェンダーとポライトネスとの関わりについて考えていく。

2. 合理主義的アプローチ vs. 言説的アプローチ

三牧(2013)は、栗原(2008, 2009)を基に、ポライトネスの合理主義的アプローチと言説的アプローチを対照させた。三牧によると、合理主義的アプローチとはポライトネスの普遍性を追求し、Brown & Levinson(1978)を発展させた、トップダウン型の演繹的手法の研究方法をとるアプローチ法である。一方、言説的アプローチとは、ポライトネスの普遍性は追求せず、自然談話の相互作用のダイナミズムを重視したボトムアップ型の研究手法である。本節では、先ず合理主義的アプローチをとる Holmes(1995)と言説的アプローチをとる Mills(2003)を対照させた後、本研究の立場を明らかにする。

Holmes (1995) は、先ず「女性は男性よりポライトである」(1)と結論付けた上で、発話権、ヘッジやブースター、褒めとポジティブ・ポライトネス・ストラテジー、謝罪とネガティブ・ポライトネス・ストラテジー等について、量的分析を行い、上記の結論への証拠を探し出そうとした。しかし、Holmes によって出された量的結果は必ずしも「女性は男性よりポライトである」という結論を証拠立てるものではない。例えば、Holmes は「誰が最も褒めを使うか？」という調査において、男性から男性<女性から男性<男性から女性<女性から女性(123)、という調査結果を膨大なデータを量的に分析することで示した。彼女は、この結果について、「この結果は女性と男性が褒めを異なった機能をもつと解釈しているためである。女性にとって褒めは結束やポジティブ・ポライトネスを表す感情表出の発話行為であるのに対して、男性にとって褒めは評価的判断を表す指示的意味、または潜在的にネガティブな面子を脅かす行為であるためである」(123)と議論している。しかし、上記の量的調査結果からこの議論を行うことはできない。さらに、謝罪についての議論においても同様の議論を行っている。「誰が最もよく謝るか？」という調査において、男性から男性<女性から男性<男性から女性<女性から女性(158)、という調査結果を示し、その結果について Holmes は、「男性と女性は謝罪に対して異なった認識をしている。男性は謝罪の自分の面子をおびやかすという機能を重視するのに対して、女性は謝罪を相手との調和を促進することを目指した発話行為と認識している」(159)とするが、上記の調査結果からはこの議論を行うことはできない。これらの議論は、女性と男性に対するステレオタイプの見方を強めることになりかねない。

Mills (2003) は、ジェンダーとポライトネスが不変で強い結びつきを持つと前提することに対して疑義を呈した。即ち、ステレオタイプ化された考え方に基づく議論や一般化は再考する必要があるというのである。Brown & Levinson (1978) を中心としたポライトネス理論に対する Eelen (2001) の批判、即ち「これまでのポライトネス理論は三重の意味で概念的に偏っている。ポライトネス・インポライトネスのポライトネスに、話し手・聞き手の話し手に、言語産出・言語評価の言語産出に偏っている」(119)との批判を受け、Mills は「人がポライトネスやインポラ

イトネスを判断する時には、文化的また社会的行動規範というものと関連させながら判断をおこなっていく。それ故に、人がどのようにして発話をポライトまたインポライトと判断するのかを分析しなければならない」(159)と、聞き手の言語評価も研究対象としたポライトネス理論の必要性を強調する。また、ジェンダー研究についても、「人々は利用できると考えられるステレオタイプや実際の行動を基にして、自分自身にとって適切だと考えるジェンダー行動をとり、解釈の枠組みとするのであるから、女性と男性を二極化するのではなく、特定の社会において人々が『ジェンダーする』やり方に注目すべきである」(198)と述べて、実際の社会におけるジェンダー行動の分析の重要性を説く。最後にジェンダーとポライトネスについては、ジェンダー・ステレオタイプとジェンダーについての理論的見解については明確に区別する必要があると述べ、Holmesの「平均すると、女性は男性よりも理解や認識の向上につながりそうな種類の会話にふさわしい文脈を作るのに優れているという十分な証拠がある」(217)のような議論を批判する。最後に、実際の会話例を分析することで、ジェンダー以外の行動規範も評価に関連していることを示しながら、「ジェンダーを単純に発話の産出や解釈を決定づける要因とみなすべきではない」(235)と結論付けている。

本論文も、Mills が主張するように「女性は男性よりポライトである」というステレオタイプの見方を前提とはせず、ジェンダー以外の文化的・社会的規範も考慮に入れながら談話分析を行うことで、ジェンダーとポライトネスとの関係を考察していくべきであると考ええる。次節では、初対面のコミュニケーションにおける談話レベルでのポライトネスを分析した三牧(2013)およびミラー(2000)を概観することで、ジェンダーとポライトネスの研究の在り方について考察を行っていく。

3. 談話分析に基づくポライトネスとジェンダー研究

三牧(2013)は、スピーチレベル管理、基本的スピーチレベルにみるポライトネスの表示、話題

の選択と転換にみるポライトネス、自己開示をめぐるポライトネス、FTA バランス探究行動等、談話レベルでのポライトネスを詳細に分析することで、初対面のコミュニケーションにおけるポライトネスを分析した。三牧は、マクロレベル・ミクロレベルでの詳細な会話分析を行っており賛同できる部分も多い。その中で、ポライトネスのジェンダー差について、男性上位者のみに観察された支配的課題管理、男性上位者のみに観察された一方的情報提供、女性上位者の協調的導入質問による課題管理、女性下位者による積極的課題管理という結果を挙げた。この結果は、Tannen(1989)の述べる男女差、即ち「男性は地位の上下をはっきりさせることが大切なので、それを強調するような行動をとる。自分の意見を主張する。女性は調和を大切とするので、対立はなるべく避ける。」という特徴と一致する。筆者も、Tannen(1989)の述べる男女差は英語のみならず日本語にも当てはまると考えるのではあるが、日本語と様々の言語を対照させると、男女差よりもむしろ文化差の方が際立つことが分かる(松村 2013 参照)。Tannen(1989)の述べる女性の特徴「調和を大切とするので、対立はなるべく避ける」は、日本では女性のみならず男性にも当てはまるものではないかと思える。三牧(2013)はマクロレベル・ミクロレベルの詳細な会話分析に基づく結果を出しており、説得される部分も多いのであるが、初対面の大学生同士の自由会話に限っているため、この分析が初対面以外の会話、日常の社会、職場等での言語行動にどこまで当てはまるかは不明である。

ミラー(2000)は、「日本人とアメリカ人は職場で相手への否定的評価をどう伝えるか」において、多文化環境の職場において否定的評価がどのように伝えられ、またどのように解釈されているのかについて分析を行った。彼女によると、長期間つきあっていくことになる職場においては、意見の相違を解消しなければならなかったり、苦情を言わなければならない時でも、会話している人たちの究極の目的は、協力し、意見が一致する点を見出し、問題を解決することである。彼らは、ある特定の状況、作業、行動について、人によって異なる解釈を生み出すような言語的、あるいは文化的に異なる前提を持っている。そのような状況でどのような行動をとるのかについて、実際に行われた会話例を挙げながら議論を行っており、説得力がある。彼らは、否定的評価

をする時は、表現を穏やかにし、和らげるということに心を砕いていた。それでも時に誤解が生まれる。否定的評価の緩和のために使われた前置きや躊躇の意味が通じなかったり、いつ、誰に評価が行われるかについての文化的前提に食い違いが起こるといっているのである。ジェンダーとポライトネスとの関わりについても、同様のことが言えるのではないかと考えられる。即ち、長期間つきあっていくことになる人たちの間の会話を分析することで、意見の相違、考えの相違は認識しながらもポライトに会話を進めていく、その方略を見ていくことが必要であると考えられる。次節では、実際の会話例を分析することで、ジェンダーとポライトネスとの関わりについて考察していく。

4. ポライトネス：ジェンダー差か文化差か？

本節では、親しい関係の男性同士・女性同士の会話、および職場での会話を分析することで、ジェンダーとポライトネスの関係について考えていく。

会話例(1) 同じ寮の学生同士が寮祭で流す曲について話し合っている。

対話者：A:22歳男性学部4年、B:25歳男性修士2年

1A: おれ、あれがいい、##(曲の名前の一部)何だっけー？

2B: あれ、歌だし、ちょっと微妙ー。

3A: うそー。あれ、おれ、好きやってんけど…。

4B: (沈黙)(3秒)

会話例(2) 親しい学生同士の買い物での会話

対話者：A:24歳女性修士2年、B:22歳女性学部4年

1A: すごい、これ見て、すごくない？

2 B: うん、(沈黙 2 秒)きれい。

3 A: これいくら？

4 B: 安いですねー。

5 A: 二千円だし、こう見てるだけで楽しいね。

6 B: そうそう、高級感があるんですけど…

7 A: いや、これちょっと見てるだけで、いいー。

8 B: うん。

9 A: 白もある、すごい！

10 B: きれいー。

#は聞き取れなかった部分を表す。

王萌収集 『平成 21 年度日本語資料集』松村瑞子・王萌（編）

会話例(1)(2)とも親しい友人同士の会話である。男性の場合は、下線部の「ちょっと微妙」「沈黙」を使って不同意を仄めかしている。女性については、下線部にあるように、「きれい」「うん」「きれいー」のように、短い反応のみすることで不同意を仄めかしている。女性の方は字義通り解釈すれば同意を示しており、「同意が短い」というところからのみ「不同意」を感じ取らなければならないという点でより間接的ではあるが、男性も女性も不同意を仄めかして伝えるという点は同じである。次に、客の苦情に対応する接客場面での会話である。

会話例 (3) 客と販売員の会話

対話者： C: 女性客、S: 女性販売員 場所：デパートアクセサリー売り場 購入したアクセサリーがイタリア製という保証書が付いていないため、返品しようとする交渉の談話

1C これ保証書付いているんですか？

2S 保証書はですね。(ええ。) ゴールドカードの方にお付けいたします。

(略)

16S イタリア製ということは間違いない、ないんですけれども…。

17C 間違いないって言っても保証書付いてなきゃわかんないじゃないの？

18S そうですね。でも、あのう、ああ、どうも、申し訳ございません。あのう、修理保証書サービスはお付けするんですけれども。特に、お客様に一点一点がイタリア製である保証書はお付けしておりませんが、でも、これは正真正銘の…

19C 知りません、私。

20S はい。あのう、イタリアから直輸入しております。またですね、あのう、そのう、ま、この輸入の、証明の証、そういった、あのうインボイス、そういったものもちゃんと証明でございますので、イタリア製というのはいもう間違いございません。

21C 保証書ついてないんだっいたらいりません。返金してください。

22S はい。わかりました。申し訳ございませんでした。

会話例 (4) 客と販売員の会話

対話者： C: 男性客、S: 男性販売員 場所：電気屋

場面：パソコンを買って8か月だが、修理に2回も出したが、やはりスピーカーが音割れするので修理してもらうための交渉会話

1C ええと、前に修理に出して、あの、(はい) スピーカーが音割れすることについて修理に出して、(はい) あの、交換して戻ってきたんですけども (はい) あの、また、なんか、

また音割れするんですね。

2S あ、さようございますか。

3C はい。

4S お調べしますので、商品を拝見させていただけないでしょうか？

(略)

78C はい、分かりました。

79S はい。大変申し訳ございませんでした。

80C はい。有難うございました。

会話例(3)(4) 胡敏男収集『平成 21 年度日本語資料集』松村瑞子・王萌（編集）

会話例(3)(4)については、下線部の女性の販売員も男性の販売員も客の苦情に対して、決して相手を批判せず、謝罪を述べながら、辛抱強く丁寧に対応していることが分かる。これらの会話を観察すると、ジェンダー差はあまり際立たない。むしろ、接客場面における社会慣習的ポライトネスが重要な役割を果たしていると考えられる。鈴木睦(1997)は、「丁寧さを保つためには、聞き手の領域に踏み込まず、決定権を話し手のことがらに限る」という原則が女性にも男性にも当てはまると述べた。ここで挙げた例についても、それが当てはまる。

5. おわりに

本論文では、対極的アプローチをとる Holmes (1995) と Mills (2005) を概観した後、三牧 (2013)、ミラー (2000) を概観することで初対面のポライトネスと親しい間柄でのポライトネスの相違について述べ、実際の会話を観察することで、ジェンダーとポライトネスとの関わりについて考えていった。ジェンダーとポライトネスについては、「女性は男性よりポライトである」と

いうステレオタイプの見方を前提とはせず、ジェンダー以外の文化的・社会的規範も考慮に入れながら談話分析を行うことで、ジェンダーとポライトネスとの関係を考察していくべきであることを示した。

参考文献

- 1 Brown, Penelope and Levinson, Stephen C. (1978) *Politeness: Some universals of language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 2 Eelen, Gino. (2001) *A Critique of Politeness Theories*. Manchester: St. Jerome Publishing.
- 3 Hill, Beverly et al. “Universals of Linguistic Politeness: Quantitative Evidence from Japanese and American English,” *Journal of Pragmatics* 10, 347-371.
- 4 Holmes, Janet (1995) *Women, Men, and Politeness*. London: Longman Group UK Ltd.
- 5 Kadar, Daniel Z. and Michael Haugh (2013) *Understanding Politeness*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 6 Lakoff, Robin (1975) *Language and Women’s Place*, New York: Harper and Row. [かつえ・あきば・れいのるず訳(1990)『言語と性：英語における女の地位 (新訂版)』有信社]
- 7 Miller, Laura (2000) “Negative Assessments in Japanese –American Workplace Interaction,” *Culturally Speaking: Managing Rapport Through Talk across Cultures*, London, New York: Continuum, 240-254. [浅羽亮一監修(2004)「日本人とアメリカ人は職場で相手への否定的評価をどう伝えるか」『異文化理解の語用論』東京：研究者、113-133.]
- 8 Mills, Sara (2003) *Gender and Politeness*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 9 _____ (2011) “Discursive approaches to politeness and impoliteness,” *Discursive Approaches to Politeness*, Linguistic Politeness Research Group (Eds.), Berlin/Boston: Walter de Gruyter, 19-56.
- 10 Okamoto, Shigeko (2004) “Ideology in Linguistic Practice and Analysis: Gender and Politeness in Japanese Revisited,” *Japanese Language, Gender, and Ideology Cultural Models and Real People*, Oxford: Oxford University Press, 38-56.
- 11 Ohashi, Jun (2013) *Thanking and Politeness in Japanese Balancing Acts in Interaction*,

New York: Palgrave Macmillan.

- 12 Suzuki, Toshihiko (2007) *A pragmatic approach to the generation and gender gap in Japanese politeness strategies*, Tokyo: Hitsuji Shobo.
- 13 Tannen, Deborah (1989) *You Just Don't Understand: Women and Men in Conversation.*, New York : William Morrow.
- 14 井出祥子、堀素子、川崎晶子、生田少子、芳賀日登美 (1985) 『女性の敬語の言語形式と機能』文部省科学研究費研究成果報告書
- 15 井出祥子 (1997) 「女性語の世界—女性語研究の新展開を求めて—」『女性語の世界』明治書院, 1-14.
- 16 宇佐美まゆみ (2005) 「ジェンダーとポライトネス—男性は女性よりポライトなのか—」『日本語とジェンダー』第 5 号, 日本語ジェンダー学会, 1-12.
- 17 壽岳章子(1979) 『日本語と女』岩波新書
- 18 鈴木睦 (1997) 「女性語の本質—丁寧さ、発話行為の視点から」 『女性語の世界』明治書院, 59-73.
- 19 因京子 (2006) 「談話ストラテジーとしてのジェンダー標示形式」『日本語とジェンダー』第 5 号, 日本語ジェンダー学会, 53-72.
- 20 松村瑞子 (2001) 「日本語の会話に見られる男女差」『比較社会文化』第 7 号,九州大学大学院比較社会文化学府, 69-75.
- 21 松村瑞子(2013) 『日本語のポライトネス—異文化理解教育の方法開発に向けて—』九州大学大学院芸術工学府博士論文
- 22 松村瑞子・因京子 (2001) 『平成 10 年度～平成 12 年度科学研究費補助金 (基盤研究(C)(2)) 研究成果報告書: 日本語の談話におけるスタイル交替の実態とその効果についての分析』
- 23 三牧陽子 (2013) 『ポライトネスの談話分析 初対面コミュニケーションの姿としくみ』東京: くろしお出版